れられているものの、記述が相対的に弱い印象を受けた。また、現代史については、一章を割り当てたのみであり、記述が乏しい。

紙幅の都合により、個別の章への言及ができなかった部分もあるが、平易な筆致の中にも、最新の研究成果を前提とした斬新な記述が至る所でなされており、近世以降現代に至る四百年余りの日本の歴史の理解を、個別的事例の把握にとどまらず、大局的に、また重層的に深めることが可能な書となっており、「刊行にあたって」で示された、「個々の分野の動向を他時代、他分野の人たちも理解できるように整理・提示し、新たな展望への足がかりを築くとともに、大学での一般教養教育に役立て、教養日本史を魅力ありかつ豊かなものとすることを目指す」とした目標には、十分応えられていると考える。最後に、本書は二分冊が予定されており、続編の「古代・中世編」にも期待したい。

（A5判　三九〇頁　二〇一〇年五月　ミネルヴァ書房　税別二八〇〇円）

（吉野健一　京都大学大学院文学研究科博士課程）

ベルナール・レミィ著、大清水　裕訳『ディオクレティアヌスと四帝統治』

本書は、文庫クセジュに収められた、ローマ皇帝の一人ディオクレティアヌスの治世と彼の業績に関する翻訳書である。同帝が行った政策と諸改革が手際よく解説されている。

ディオクレティアヌス個人とその治世は、史料そのものの不足と偏向のため、様々に位置づけられ、毀誉褒貶を被ることが多かった。彼は、キリスト教徒に対する迫害者であり、また後期帝政最初の皇帝でもある。そのため、帝国の再建者とされもしたし、帝国の権威主義化・全体主義化の責任者のように扱われもした。四人の皇帝による統治という政治プランは当初から計画づくであったとする研究者もいれば、逆に残りの皇帝に対するディオクレティアヌスの主導権と統率力を疑う者もいた。著者のレミィは、ディオクレティアヌスは「明晰で現実的な政治家」であると捉え、利用可能な史料を動員し、彼の治世を描く。

レミィの叙述はイデオロギー的に偏ったところのないニュートラルなものと評してよいだろう。過度に革新性を強調することもなく、その施策の全てをマイナスの方向に読み解くようなこともしない。たとえば、税制については、欠陥もあったが概ね効率的であり、都市行政への負担・介入を強調しすぎるべきではない、国家による経済統制などなかったと述べている。これ以後のローマ史を眺める際にも、このような視点を採用してみてはどうだろうか。

結論の部分で、少しだけ、レミィは長いタイムスパンからディオクレティアヌスの評価を行っている。彼は「最後のローマ皇帝」であり、次のコンスタンティヌスはビザンツ帝国という新体制の創設者である、と。その点では、レミィは後期帝政の統治体制の形成ではなく、キリスト教とローマ帝国の関係の変化の方に時代の画期を見出していると言えるかもしれない（もちろん本書は別にキリスト教中心史観を採用しているわけではないが）。

ここからは訳について。まず、訳者が選択した「四帝統治」という語。これはテトラルキア（仏語では tétrarchie）を訳した

ものであり、邦語文献では「四分統治体制」とも訳されるが、訳者は原語の意味に忠実に「四帝統治」としている。確かに訳者の考えるとおり、テトラルキアには「四」と「統治」という意味はあるが、「分ける」という含意は存在しない。ディオクレティアヌスの統治が、四人の皇帝による単一の帝国の統治であったことを明示する、的を射た訳であると思う。

また、原文では本文中の（　）内に指示されている註や典拠などのうち、長いものは傍註という形で抜き出され、本文中で言及される文献も巻末に別個にまとめる、という読者への便宜も図られている。ただ、その結果、訳文中に括弧の種類が増えているため、少なくとも〔　〕が訳者による補いであることはどこかに明記しておくことが望ましいと思う。

最後に、気がついた範囲で誤植・訳語に関して少々。六七頁「サトゥスルヌス金庫」(p.53 le trésor de Saturne)。おそらく誤植で「サトゥルヌス金庫」。八六頁節題「無料の現物奉仕」(p.70 Les prestations gratuites)。「現物奉仕」では意味が分からないので、「無償奉仕」くらいか。一一八頁「キリスト教の聖人たちの暮らしや宣教者たちの攻撃は」(p.100 les vies de saints et les diatribes des évangélisateurs)。ここでは史料ジャンルのことのようなので、「聖人伝や宣教者たちの誹謗文書は」。

（新書判　一五四＋vii頁　二〇一〇年七月　白水社　税別一〇五〇円）

（西村昌洋　龍谷大学非常勤講師）

『史林』投稿規定

◇資格　本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さ

論説　1段組54字×19行の体裁で、三二〇〇〇字以内

研究ノート　2段組29字×20行の体裁で、二〇〇〇〇字以内

研究動向　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内

史料紹介　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内

書評・論文評　2段組、八〇〇〇字以内

紹介　3段組、一二〇〇字程度

◇いずれにおいても、本文や注だけでなく謝辞や図表・翻刻を含めて、それぞれの紙幅に収めること。

◇注は各章末に入れること。

◇「欧文タイトル」を添付すること。

◇論説には「要約」(四〇〇字以内)を添付のこと。「要約」は上記の紙幅制限の対象外とする。

◇論説および研究ノートの投稿者は、掲載が決定した時点で、「欧文要約」(六〇〇～八〇〇語程度)を提出すること。なお、